

本当にあった「菊姫物語」

幕末のお姫様はバツ二

戸山 恵子

(会員 佐伯市匠南区)



太閤といえば秀吉、北の政所は於禰、黄門様は水戸光圀。実際は歴史上何人もいた人達が、現代の私たちは一人に限定してしまうのは、その人が傑出した経歴を持ったことによると思います(関白を引退した人を太閤とよび、同じく関白の妻を北の政所という)。役職名ではありませんが、女性の名前もそうです。亀姫、千姫、千代姫、鶴姫はそれぞれ、家康、秀忠、家光、綱吉の長女です。ありふれた名前だから江戸時代にはゴマンといたお姫様の名前でしょうが、後世の私たちは千姫と聞いただけで、ああ…あの千姫…と彼女のプロフィールが浮かんでしまうほど、代表的な名前になっています。

では、「菊姫」といえば？…そう、今年の大河ドラマの中、上杉景勝夫人の「菊姫」です。彼女は歌舞伎の八重垣姫のモデルにもなったという、美しく、賢い女性として、終生、夫景勝を支えます。宿敵、武田信玄の四女として生まれ、実家と婚家のために立派に役割を果たし、五人いた信玄の娘の中では幸福な一生を送りました。

さて、その菊姫の姉(真理姫)の娘が、毛利高政に嫁いだから一八〇年後、毛利家にも「菊姫」が誕生しました。時間こそ隔たっているものの、二人の菊姫の共通点は、美し

く賢かったということ、夫や実家の領地は生涯見ることができなかったこと、そして、二人とも初婚ではなかったこと、この三つでした。

多い離婚・再婚

江戸時代、大名家の離婚率は一二・六%と現在でも驚くべき数字です。気になるのはその原因ですが、もちろん正史に記されるはずありませんが、当時は相手の顔さえ知らず結婚するのですから（恋愛はおろか見合いもなかった…らしい）性格の不一致ということになるでしょう。

それに、女性の意思がある程度は尊重され、イヤなものもイヤとはつきり言えたんじゃないかと思えます。もちろん、実家の経済力・政治力があつたからでしょうが。それともう一つ、再婚率も高いのが江戸時代の特徴です。なんと六〇%！。しかも江戸時代も時代が下がるにつれて上がってくる現象があります。

佐伯藩毛利家の場合

毛利家でも初代から五代まではお姫様そのものが少ないのですが、六代高慶（三人中一人）、七代高丘（二人中一

人）、十代高翰（四人中一人）が離婚し、なお且つ再婚しています。

藩主では三代高尚、五代高久が離婚経験者ですが再婚はしていません。九代高誠、十二代高謙は正室が亡くなった後、再婚しています。また四代高重、六代高慶の継嗣高能の二人など、若くして亡くなると（二一才・二四才）奥方は実家に戻っています。その後は：やはり？再婚しています。



「菊姫」登場

ここで紹介する「菊姫」も実はバツ二。毛利家で二回の離婚経験者は彼女だけです。

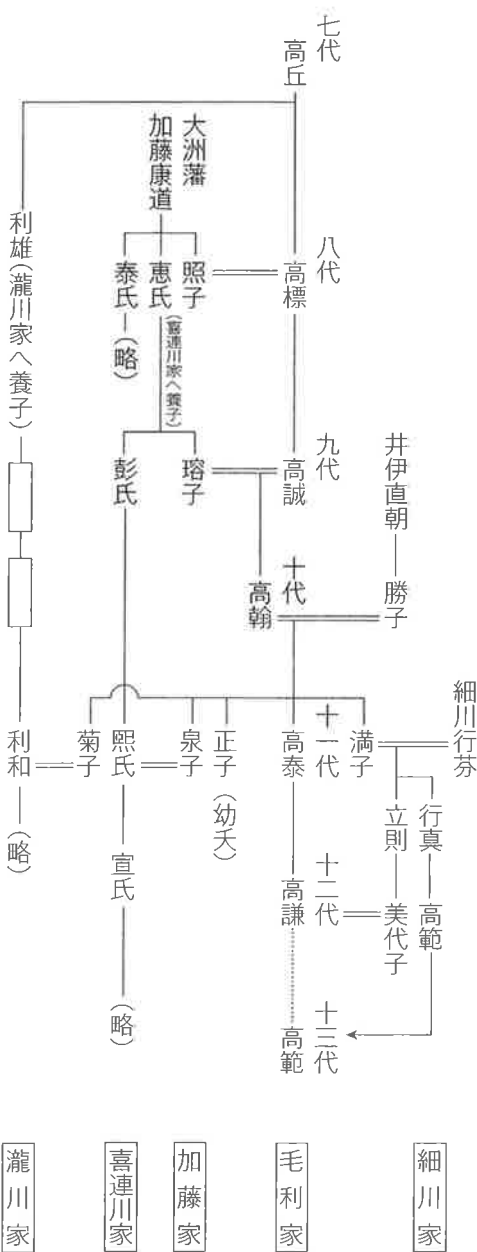
彼女を廻る幕末の毛利三姉妹の血脈は、大きな大きな円を描くように広がり、ついには天皇家にまで達します。（系図①②参照）（いらん世話ですが；幕末から明治にかけての交際費は大変なのだつたらうと思えます。）

歴代藩主の正室の実家や娘の嫁ぎ先とは二重三重の婚姻関係を繰り返すことで毛利家を守る外壁を造っていったんでしよう。

一八一七年（文化十三年）佐伯藩十代高翰たかなかの三女として

江戸で生まれた菊姫。母は彦根藩の支藩である越後与板藩、井伊直朝の娘で、名前は勝子。(余談ですが、この与板藩は、大河ドラマの主人公、直江兼続が治めていました。)その勝子の姉は、本家の井伊直亮の後妻です。有名な直弼は直亮の弟。その直弼の息子直安の娘賢子と、十三代毛利高範が結婚しています。毛利家も幕末動乱の家中にいたわけです。(系図②参照)

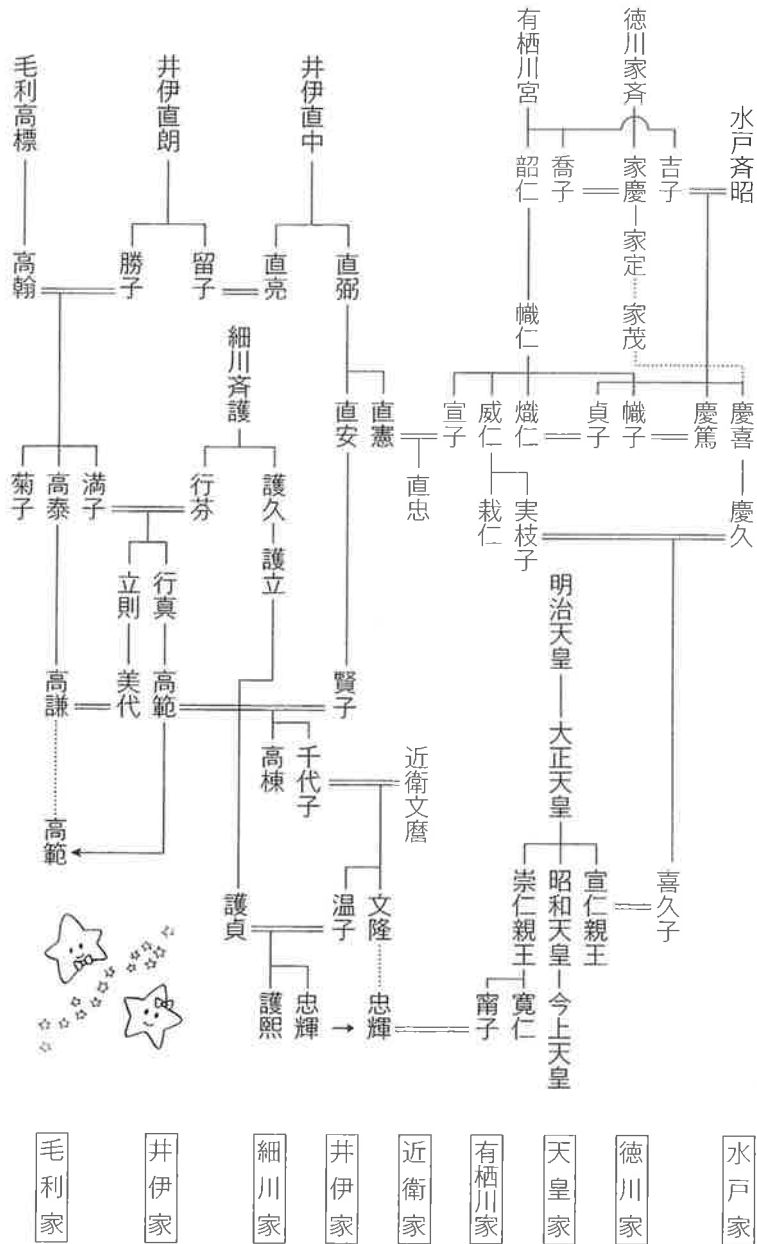
図① 毛利家縁組み略系図(高翰三姉妹を中心に)



菊姫の最初の夫、瀧川利和は五千石の旗本でした。一八三八年、菊姫十七才。

瀧川家は、あの豊臣秀吉の盟友、瀧川一益の娘婿である雄利を始祖とする名家です。毛利家とは六代高慶の孫、七代高丘の子どもたちが次々に養子に入り名跡をついでいます。(系図③参照) 残念なことに利和との間に子どもは生まれず、三代に渡る滝川家との関係は菊姫が去ってからは

図② 各家縁組み略系図



毛利家

井伊家

細川家

井伊家

近衛家

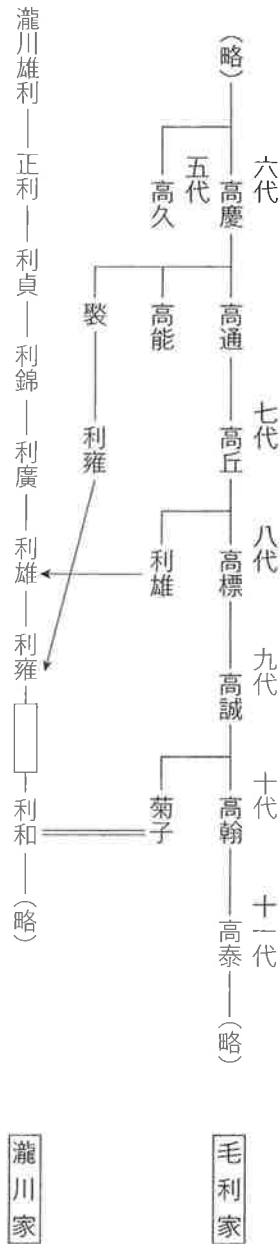
有栖川家

天皇家

徳川家

水戸家

③ 毛利家と瀧川家



ありません。

それから数年後、一八四一年(天保十一年)十二月三日、名前を政子と改め再婚。相手は大溝藩二万石(滋賀県)分部光貞。お互い二十四才の再婚同志。けれども、この結婚も僅か三年で終わってしまいます。夫との間には一人娘がいましたが、生まれて間もなく亡くなるという悲劇もありました。この娘の名前を「菊」といいます。自分の名前を付けたんですね。離婚の理由はわかりませんが、別れた夫の光貞はその後二回、合計四回結婚・離婚を繰り返しています。最後は、嫡子を生んだ側室を正室に昇格?させています。

菊姫の姉や妹は嫁ぎ先で亡くなりましたが、彼女だけは実家で、しかも実母と共に過ごすことができました。十一代高泰とは母が同じで、すぐ上の兄にあたるので、毛利家でも大切にされたことと思います。

おわりに

ここからは全く私の個人的な想像なのですが、聞いて下さい。

高泰は一八六三年(文久三年)佐伯に自分の隠居所「天祐館」を造っています。完成したら、妹の菊姫を伴い、故郷の佐伯に帰るつもりだったのではないかと思います。

です。正室の生んだ娘は江戸で生まれ、嫁ぎ先も江戸にある大名家と決められているから、生家や婚家の領地を見ることは生涯ないのです。心優しい兄は、不幸な結婚をした美しく賢い妹に穏やかな晩年を過ごさせてやりたい、風光明媚な佐伯を見せてやりたい、そう思ったのではないかと。

しかし、天祐館が完成した年に、妹菊姫は四十六才の若さで亡くなってしまいます。病床の妹のために工事を急がせる兄、まだ見ぬ佐伯を思い浮かべながら亡くなった妹。まるで美しい時代小説の世界です。

もし、現代に菊姫を連れてこられたら、私は春祭りの前夜祭ともいうべき“竹灯物語”にお連れして、美しく幻想的な姿を菊姫にも見せてあげたい、いえ、あの灯りこそ、菊姫を佐伯にお迎えする道しるべ……のような気がしてならないのです。



高翰の4人の姫君？ 右から満（母は正室の勝子）、正（母は側室の葉茂）菊（母は満と同じ）、泉（母は側室の佐伊）母親が異なる姉妹は、こうやって一同に揃うことはなかった？

（2009年、佐伯春まつり、大名行列にて。4人共承諾済み）